

沖縄独立問題とこの國の民主主義のかたち

—北海道独立論に展開させて考える—

佐々木 建

(ささき けん)

(京都グローバリゼーション研究所主宰)

1

「沖縄」という地名を聞くたびに、私はいつも熱くなっていたものだ。学生時代に自治会の幹部として沖縄返還運動に関わり、沖縄の本土復帰実現に自分なりに全力をあげてきた当時を思い起こすからだ。

同時に最近の私は忸怩たる思いにもとらわれる。憲法9条にしたがって基地のない核のない沖縄を平和を希求する日本に取り戻そうという思いは、1972年に当時の総理大臣佐藤栄作が主導して実現した返還によってももの見事に封じ込められてしまった。核付き基地付きで返還されただけでなく、この國の保守勢力が憲法を無視して走り出すきっかけともなってしまう

た。こともあろうにその佐藤栄作が返還を実現したことが評価されてノーベル平和賞まで授与されたのだからたまらない。

権力側に返還という運動目標があのように見事なまでにかすめ取られて以来、いったい憲法の掲げる平和を守るという理想のために私は何をしてきたのか、普天間・辺野古問題に対していったい私はいま何ができるのか、いつも自問していた。体力が許すなら、沖縄に出かけて闘争に参加したい気持ちは募るばかりであった。参加できるならば、それは自分のこれまでの無知無能に対する贖罪の旅になるはずだった。

沖縄返還を要求して闘っていた頃の私は、政治的には独立した国として存在していた琉球王国を暴力的に併合した 1879 年の「琉球処分」についての知識はまったくなかったと行ってよいだろう。高等学校の日本史でも教えられなかったし、大学の講義でも同様だったと思う。沖縄県人に対して根深い差別意識があることは、関西に住むようになってはじめて知った。併合によって彼らは自由な通商国家として発展する可能性を封じ込められ、この国の貧困階層のなかに押し込められたのである。併合は本土への低賃金労働力の供給地の地位を与えるだけのものだった。

大阪市の旧港あたりに沖縄県人が集中して住む地域がある。彼らが沖仲仕という厳しい肉体労働に従事していた時代の証である。大阪の繊維産業を支えたのは君が代丸にのって渡航してきた朝鮮人たちだけでなかった。若い沖縄出身の女性たちも送り込まれていたことも忘れてはなるまい。沖縄はまた、海外移

民の最大の送り出し地域でもあった。アメリカ軍の基地拡大のための土地収用によって追い込まれた人びとのなかには海外移住に活路を求めた人も多かった。沖縄がこの国の中で占めていた位置は明らかだった。

これらのことは、私が経済学者として関西に住んではじめて知ることができた。文献によって学習しなくとも、目を見開き耳をすませば、沖縄の現実には誰にでも見えてくるものだったのではないだろうか。

学生時代の私は沖縄と本土が民族的に一体であることを信じて疑わなかったのである。間違ったのは、私だけではなかったようだ。あの頃盛んに唄われた「沖縄を返せ」という労働歌がある。デモ行進や集会の時に唄われる定番の曲である。いまその歌詞を読み返してみると、歌詞のつじつまがあわない。あの頃を熱く思い起こすよりも、いまではむしろ違和感のほうが大きいのだ。

かたき土を破りて 民族の怒りに燃える島 沖縄よ
我等と我等の祖先が血と汗をもて
守り育てた沖縄よ
我等は叫ぶ沖縄よ 我等のものだ沖縄は
沖縄を返せ 沖縄を返せ

(作詞：全司法福岡支部 作曲：荒木栄)

ここでいう「民族」とは琉球・沖縄民族のことなのか、それ

とも単一民族的理解に立つ日本民族のことなのか。いま私の乏しい知識を手がかりに考えると、後者のように理解していたように思うのだが、あの当時は運動を指導していた日本共産党も含めて単一民族論に染め上げられ、民族としての一体性を信じて疑わなかったと思う。権力の側と運動の側との奇妙な一致があったのだ。

「我等」とはいったい誰のことなのか。本土の市民と理解すると、併合の歴史的事実と合わなくなる。沖縄は本土の市民が「血と汗」で守り育てたものではなく、明治政府が暴力的に併合し、苛烈な同化政策によって日本の一部とされ、貧困の中に押し止められたままにされたのだから。「我等」が沖縄県民を意味するのであれば、この歌の内容はいまでも訴えるものがある。この歌は沖縄ではいまでも集会やデモの時にうたわれているという。ただ、最後の「沖縄を返せ 沖縄を返せ」の後半部分を「沖縄に返せ」としているのだそうだ。

沖縄について正しく学ばねばならないと考えるようになった。そのうえで、なおアメリカ軍基地を押しつけられてその重圧にあえぎ、中央政府の差別的な政策に苦悩する沖縄県民との連帯の新しいあり方を模索しなければならないときが来ていると思っていた。そのような時に、太田昌秀・新川明・稲嶺恵一・新崎盛暉氏らによって著された『沖縄の自立と日本一「復帰」40年の問いかけー』（岩波書店、2013年8月）に遭遇したのである。

この本は、2012 年秋に法政大学沖縄文化研究所主催で行われた「「復帰」40 年、これからの 40 年」と題するシンポジウムでパネラーをつとめた 4 氏による寄稿と、あらためて沖縄大学で行われた座談会の記録という二つの部分からなっている。

著者たちはみな私と同世代か少し上の年代の人で、私が本土で参加した復帰を求める運動を現地で闘った人たちである。彼らの寄稿論文と座談会発言から、私は当時の沖縄の側での運動の姿をはじめて知ることができた。これからの私の学び直しに役立つ教訓も沢山得ることができた。いや、そんな月並みな表現では、私がこの本からうけた衝撃の大きさ、私が抱いた情念を表現しきれものではない。著者たちが口々に語る沖縄の側での復帰に関する疑念と悔悟の感情を知れば、私がかって抱いていたと自負する連帯感など実にいい加減なものに思われるのだ。この国で現代史を語り学ぶものは沖縄の歴史と現実を踏まえなければならないと考え始めていた私にとっては、この本は、心強い支援である以前に、私を徹底的に打ちのめすものであった。

寄稿者の視点も主張も多様で、展開されている議論を一点に収斂させてまとめることなど、私の能力にあまる。寄稿者が提示している理念のそれぞれが重要な意義があるものだから、それぞれの寄稿論文を精読してもらおうしかないのだが、とりあえず著者を代表して大田昌秀氏が「まえがき」を書いておられる

要点を示しておくことにしたい。

太田氏はまず、沖縄の人びとが切実に希求したのは「平和憲法の下への「復帰」」だったにもかかわらず、まったく反対に「日米安保条約の下への「復帰」」になってしまったこと、しかも最近の辺野古移転に固執してやまない日本政府の態度に沖縄の人びとは「いったい日本にとって沖縄とは何なのか」と痛苦の想いで問い返さざるを得なくなっている、まさにこの点については寄稿者・パネラーは一致しているという。

また沖縄がいまだに米軍基地の重圧のもとで日米両政府によって構想的に差別されている実態についても一致があり、沖縄をアジアに開かれた平和な沖縄にすること、基地依存経済から自立・内発的経済発展に転換させることの必要性でも一致しているとする。しかし、独立か自治州か、どのような道筋で実現していくかについては「若干の違い」があったとする。

この「違い」がこの本の表題の曖昧さにも表れている。「自立」とか「自己決定権」とかいう表現では何が主張されているのよくわからず、著者たちによって主張されている理念が正しく反映されているとは思われない。本土の閉塞状況を横目に見ながら過激に過ぎる表題をつけることに慎重になったのだろうか。その慎重さが著者たちのものではなく、本土の出版社側から発せられたたものであったとしたら、私は編集者たちの志の低さを嘆く。書店でこの本を手にした本土の人間にそれだけで衝撃を与えるタイトルであってほしかったと思う。

これから議論を深めていくのだから、論点の違いがあるのは

当然であろう。この本が本土の心ある人びと、「主権回復の日」に異議をとなえた人びとに読まれ、議論が深まっていくことを期待する。

3

久しぶりに真摯な問題提起を含んだ本に出会えて、読みながら高揚感を覚えた。読了して、以前から抱き続けていた私の態度に確かな論拠を得たような気がする。

私は数年来、沖縄の基地問題を解決するには日本からの独立を求める以外に道はないのではないかと考えはじめています。本土の政府が沖縄県民の利益を全面的に支持して行動するはずもないし、本土市民の無関心ぶり、その無関心と結びついて偽りの愛国主義にとらわれた保守的傾向が強まり、かつてのように沖縄基地問題の解決を国民課題として行動する可能性は限りなく小さくなっている。独立して日米安保体制から離脱し、基地のあり方についてアメリカと直接交渉した方がよい、そのことを国際世論に直接訴えた方がよい、周辺諸国によって中立を保證される体制を求めた方がよいと思いはじめています。

この気持が強くなったのは、この本の中でも著者たちによってたびたび言及されている「主権回復の日」事件だ。政府は1952年4月28日のサンフランシスコ講和条約発効の日を「主権回

復の日」として祝賀することを決定し、それを強行した。政府や保守勢力の歴史認識に怒りを覚える前に、私は彼らのあまりの無知さかげんにあきれかえった（1）。

サンフランシスコ条約発効後も沖縄はアメリカの占領下に置かれ基地の島であり続けたし、北方四島は今なおロシアに占拠されている。この明々白々の状況を見ても無視するやからが態度を変えて沖縄の将来について真摯に取り組むようになるとは到底考えられない。

しかも、日米安保条約や沖縄の役割や、沖縄県民に課せられている過酷な基地負担について、当時を知る人びとは本土では高齢になり、日ごとに少数になっている。本土での関心は希薄になっているといわざるを得ない。「主権回復の日」事件への世論の反応も弱かった。学校教育で戦後政治が正確に教えられているのだろうか。このような状況の下では、沖縄県民の闘いを支援する国民的大運動など起きるはずもない。

この本を読んで、私は沖縄に独立を目指す動きがこれほどまでに明瞭に展開されていることを知り、心中で歓喜の声を上げた。私は沖縄独立運動を支持する。これを機に独立問題が本土でも真摯に議論されることを望む。独立の是非を議論する条件は十二分に整っている。その実現が先のことではあっても、大きな声で議論するだけでも意味がある。

独立問題はいま、民主主義を発展させるものとして世界中いたるところで議論され準備されている。アジア・アフリカ世界にとどまらない。ヨーロッパも含めてのことである。イギリス

ではスコットランド独立の是非を問う住民投票は目前に迫っているし、スペインのカタロニア、バスクの独立運動、ベルギーのフラマン系住民の独立運動、フランスのコルシカ島独立運動等、数え上げたらきりがなほど運動が展開されている。それらの分離・独立運動は反動的なものばかりではない。いま所属している国や地域の民主主義の発展に貢献するものであることは明らかだ。沖縄の独立問題も、これらのヨーロッパの体験に照らしてみると国際的に十分に理解を得られるものだと思う。

第1に、沖縄が歴史的にみても文化的に見ても本土の文化とは異質のものであったことはすでに海外でも多くの人たちに知られている。沖縄に見られる日本的なものは「琉球処分」という暴力的併合とその後の苛烈な同化政策によって作り出されたものであることについて理解を得ることはそれほど難しいことではない。

第2に、第二の「琉球処分」ともいべきサンフランシスコ条約以降の構造的差別の苛烈さを世界の良識ある人びとはあまり知らない。小さな島にあれほどまでに多くの米軍基地が集中し、基地提供条約としては他に例を見ない治外法権的關係がいまなお維持されている実態については知られていない。

沖縄の抑圧の歴史と現状について、心ある人は機会を捉えて国際世論に訴えるべきだろう。「主権回復の日」を企画し実行した政治家たちと取り巻きに期待するのはやめよう。偽りの国民意識に毒されて反応の鈍い本土の世論に期待するのはやめよう。独立の必要性を世界に訴える事の方がはるかに有効であり

意義があることではないか。

独立して沖縄ははたして経済的にやっていけるだろうか、基地の経済的効果を超える代替策はあるのだろうか、独立を論じる際に沖縄県民によぎる不安はおそらくこの問題だろう。このことが独立を主張するに当たっての消極的態度につながっているようにも思われる。かつて琉球王国が通商国家として繁栄したように、沖縄はこの地域での仲介的機能を担えば、確実に独自の経済構造を作り上げることができる。国際機関の誘致も可能だし、大学や研究機関の誘致も考えられる。観光業が今以上に発展することは言うまでもない。工業の発展を重視し内発的発展にこだわって独立の経済的根拠を議論することはあまり意味のないことではないだろうか。

4

この本を読みながら、私は自分が生まれ育った北海道について抱いていた感情を強く意識するようになっていく。北海道も独立を目指すべきではないか、そのことによってこの國に豊かな民主主義と多様な文化をもたらすべきではないか、と。

近年、アイヌが先住民であるとする国会決議が行われた。当然、それに対応して北海道の歴史は書き換えられなければならないし、北海道の歴史だけでなく、この国の歴史そのものが書

き換えられなければならない。

アメリカやオーストラリアで先住民に対するいわれのない虐殺や苛烈な同化政策の事実や歴史、いまに至るまで続く先住民差別を知る日本人はいないわけではない。ところが、肝心の自分の足下の民族問題についての知識は、私のまわりを見る限りでは、まったくないと言ってよいのではないか。これは誤った教育の結果であると同時に、北海道がこの国の歴史に占める地位を反映したものだ。ようするに蝦夷や北海道での歴史的体験を軽視し蔑視してきた結果なのだ。その上で、北海道に残っているとされる「自然」や「大自然」なるものにばかり関心を向けさせるように仕組まれているのだ。沖縄問題と根は同じではないかと私は考えている。

アイヌがこれから何を要求するのか。アメリカやカナダの先住民がしたように、これまでの過酷な搾取と同化政策に対する謝罪と経済的補償を要求するだけでは不十分だろう。是非とも歴史の書き換えを要求してほしいと思う。そのことによって北海道は日本人にだけ与えられた領土ではなくなる。このことはアイヌの要求としてだけでなく、北海道に住む日本人にとっても真剣に考えるべき問題だと思う。

幕末、明治以来の歴史を観察すると、私にはこの国の支配者たちが北海道を含む北方辺境地域を明確に固有の領土と自覚して政策を展開してきたようには到底思われぬ。ロシアの南下政策の圧力を押さえ込む最前線の位置しか与えられていなかった。その圧力を受けて、日本の支配層の領土認識はその時々の

政治的関係を反映して変動してきたのではないか。樺太や千島列島の帰属をめぐる歴史はそのことを如実に物語っている。

アイヌに対して行われた性急な同化政策、日本人化政策もその力関係を反映していた。蝦夷が松前藩の支配から召し上げられて幕府直轄地になったのは、ロシアの南下に対抗するためであったが、そのために行われた施策の中核は、蝦夷を日本人の住む領土と認定させるためにアイヌをできるだけ早く日本人に仕立て上げることであった。和人風に鬘を結わせ着物を着せるだけでなく、宗教政策も大きな役割を果たした。ロシアがアイヌにキリスト教を広めようとしたのに対抗して、幕府も官営寺院を建立しアイヌを強制的に帰依させ統括したのである。いわゆる「改俗」が強制され、アイヌの固有の文化は急速に衰滅してゆく。この同化政策こそが先住民としてのアイヌを無視するいまのこの國の民族意識の出発点であった(2)。

北海道を含む北方の辺境は、そこに生まれ育った私にとっては植民地そのものであった。温暖な本土に比較してあまりに長く厳しい冬が続くこの地域は、本土の日本人の定住には適していなかったから、移住を希望する人は少なかった。当時は米も栽培できなかつたのだから。だから、領土として保持しようとする態度は権力の側で確固たるものではなく、領土認識はつねに動揺、変動した。開拓もアメリカ政府の支援を得てようやく開始されたのであった。

アイヌから略取されたその大地は権力者たちの利権争奪に好きなようにゆだねられた。資源豊かな地域であったばかりに、

それらの資源はすべて利権を独占する集団によって収奪されて本土の経済発展に資本として供せられた。日本の資本主義的発展の前提となった「本源的蓄積」の時代の最も重要な側面であった。

幕末から明治初期に回船業を営む内地の特権商人が松前藩や幕府から漁業場所経営を請け負い、アイヌの搾取によって獲得した漁業産品（主として鯨ノ滓と昆布）によって巨大な富を蓄えた。その蓄積された資金のほとんどは勃興する内地の資本主義的経営に投資され、北海道にはほとんど何も残さなかった。

開拓使の支援によって開発された鉱業も、本土の富国強兵策の基盤として開発が進んだ。ほとんどが財閥傘下の企業によるもので、労働力不足は囚人や屋朝鮮人の労働力に頼って解決がはかられ、前の戦争の時代には強制連行された朝鮮人労働者によって補われた。「タコ部屋」と通称される非人間的労働形態も北海道に固有の搾取様式であった。

狩猟をなりわいとしていたアイヌの大地はすべて国有地として囲い込まれたが、入植は遅々として進まなかった。戊辰戦争の敗者の懲罰的入植、対ロシア戦を想定した屯田兵制度の創設等によって入植を促進しようとした。僧侶たちまでもが動員されたのである(3)。その入植や開拓が原野と原生林を切り開くものであったために困難を極めたことは、歴史書の平板な記述によるよちも多くの文学作品によって知ることができる(4)。

国有地は結局は、華族や資本家、官僚たちに好きなだけ提供された。これがアイヌから土地を略取して実行された北海道開

拓の最も重要な側面であった。その結果、北海道は不在地主による大規模農場経営が支配的な地域となっていた（5）。戦後の農地改革によって不在地主の所有する農地は小作人に分配されたが、森林や牧場は彼らの手に残された。いまに続く北海道出身の名士たちはこの国有地払い下げにより財をなした一族の子孫たちである。

このように北海道の歴史を観察すると、アメリカの出来のよくない西部劇映画を見る思いがする。先住民を追い立て、その土地を早い者勝ちで囲い込んで牧場にしていった、あのアメリカと北海道とではいったいどこが違うというのだろうか。

北方境界が中央権力によってまともに経営されてきたことはないという私の考えは、現在のいわゆる「北方領土」問題についても当てはまる。ロシアの機嫌をとる総理大臣の狙いは経済的関係の強化によって多国籍企業の利益を最大にすることであって、北方領土返還を旧島民や現地市民の願いに応じて解決しようとする決意があつてのことではないように思われる。むしろ、これまでの権力がそうであつたように、領土を生贄として差し出すのではないかという危惧の念を持つ。幕末・明治以来北方境界の領土問題の解決方法は現在でも変わっていないのではないか。

私はいつも北海道の独立を夢想する。津軽海峡に引かれているブラキストン・ラインは本土との生態系を分かつだけのラインではあるまい。独自の文化圏を画するものではないのか。沖縄の場合と同じように、独立してロシアを含む北方諸国と新し

い経済圏を形成した方が大きなチャンスが与えられるのではないのか。北方領土問題の解決にも新たな展望が開けるのではないのか。

そうなれば、私は少年時代から抱いていた嫌悪感や劣等感からもようやく解放される。現代にまで続く本土を補完するだけの地域から解放される。卑屈にも見えたあの内地・中央に対する劣等感からも解放される、そして最終的に歴史のない地域から解放されるのだ。植民者の子孫として私は先住民であるアイヌと歴史認識を共有できる日が来ることを切望している。

独立を模索する多様な論議を期待する。独立を明言しなくとも、北海道の独自の歴史や文化のあり方について、議論が活発になることを期待する。北海道の場合は沖縄とは状況が違ふことはよく承知している。しかし、たとえ実現不可能なものであっても、そのことを今の時代に論争することは意義があることだ。

同時に、私がここで北海道独立論を披瀝したのは、北海道生まれの私が沖縄問題について知識が乏しかったのと同じ程度に、この本に示されている沖縄のリーダーたちの北海道認識も同じ水準であることに驚き、そのことに注意を喚起したかったからでもある。

後半の座談会で太田昌秀氏が平恒次氏の著作を援用して北海道独立論に言及しておられる(太田昌秀他、前掲、198ページ)。ところが、アイヌ問題についての言及がない。しかも事例としてあげられているのが榎本武揚の「蝦夷共和国」というのだから

らおそれ入る。榎本は戊辰戦争に敗れて函館にのがれ、生き延びるための窮余の策として「共和国」をでっち上げただけだ。彼は先住民であるアイヌのことなど考えもしなかったし、知識もなかったに違いない。あり得ないことだが、彼がアイヌに働きかけ、彼らの支持を取り付けて「共和国」樹立を宣言していたら、事態は少しは変わっていたかもしれない。そうなれば彼のとった行動は確実に歴史に残っただろうに。彼は蝦夷を無人の地を勝手に考えていたのだ。場合によっては、その一部や利権を列強に売り渡していたかもしれない。そのような試みを独立運動と評価することはできない。北海道独立があり得るとすれば、アイヌの運動との連帯、そして内地殖民政策によって北海道に取り込まれて苦渋の体験の中で生きた大衆の気分の高揚が結び合わさった時であろう。

最後にもう一つ、沖縄と北海道が持っている共通項に言及しておきたい。沖縄が本土決戦の捨て石であり、国体護持のために捧げられた生贄であったとすれば、北海道も同様の役割を担わされていたと私は考えている。本土決戦を叫んだ軍部のいう本土とは、イザナギ・イザナミの國産み神話にいう「大八洲」（おおやしま）のことであって、沖縄と北海道はそれに含まれていなかったことは明らかなのだから。日本は大小多数の島からなる国であることを表現しているに過ぎないとこの表現を解釈するのは、後から考えたつじつま合わせにすぎない。島国であることを表現したものであるなら、この言葉が頻繁に使われた頃の日本に併合されていた韓国はどうなるのか。大陸と地続

きだったではないか。

沖縄県民と違い北海道民が運がよかったのは、戦争が早く終わったことだった。

5

私の当面の願いは、独立や自治を目指す議論が活発になることによつて、この国を支配してきた画一的な偽りの国民意識と愛国主義を動揺させることにある。国を構成する民族の多様性を尊重し、その独立の要求に真摯に公正に対応する、それこそがこの国の民主主義の根幹であるべきなのだ。

この流れに逆行する傾向が世界中で強まっている。その代表格が大ロシア主義を標榜しその実現に邁進するプーチンのロシアと中国である。中国は「中華民族」などというありもしない民族を標榜して、憲法に規定されている多民族主義を蹂躪し、対外的に大国主義と愛国主義を煽り立てている。これに対応するかのように日本の側でも異様なまでに民族主義が煽り立てられている。その行き着くところは国際的孤立と戦争以外にないという状況にむかってまっしぐらに進んでいる。

この国では国際的孤立の中で国内で異様なまでに排外的な民族主義が煽り立てられ、結局は無謀な戦争に突入していった苦い体験を持っている。国民と周辺の国ぐにに惨禍をもたらした

あの体験を二度と繰り返させてはならない。そのためにはどうしたらよいのだろうか。内部の多様性を議論し、それを組織的に確認していくことを積極的に進めよう。内部での多様性を認めない、内部での諸関係に柔軟に対応できない国家が外に対して柔軟であるはずがなく、国内の多様性を認めない国は他国が多様性を理解できるはずがないのだから。

沖縄の独立が追求され、アイヌの先住民としての地位を実質的なものとするための政治的運動が強まり、それと結びついて北海道の独立や自治が論議され始める、このような状況は権力を握るものたちには国を弱体化させる「非国民的」行動とうつり、非難されるかもしれない。しかし、これらのことが公然と議論されるだけでもこの国の民主主義は確実に豊かになる。

私がこの数年、「小国論」と題して執筆を進めているのも、ねらいはまさにここにある。別の機会にもう少し論拠を示しながら論じるつもりでいる。

注

(1) あれだけ大がかりにやった「主権回復の日」式典を今年はやらないという。『日本経済新聞』論説委員小林省太氏は同紙 2014 年 3 月 2 日付「日曜に考える」欄で、「やった」「やめた」でいいか—「主権回復の日」の

おもいみと題する長文を掲載している。小林氏はこのやり方について次のようにいう。

「個人的には主権回復の意味を煮詰めぬままに記念式典を開くことには反対である。もし式典を開くなら、どんな性格を持たせるのか、熟慮を続けながら何年でも繰り返しやればいい。それが政権の責任であろう。

一度やってみたかっただけ、といえは批判が過ぎるか。大がかりな式典に映る安倍政権は、綿密な計算より思いつきが勝っているようにみえるのである。」

(2) このことを取り上げている北海道研究は少ないように思われる。むしろ文学作品に時代を正確に反映したものがある。佐江衆一『北の海明け』

(新潮社、1989年5月)は私の好きな作品の一つだが、官営寺院として建立された厚岸国泰寺を舞台に展開される同化政策を巧みに描いている。

アイヌ問題を研究するといいながら、このことを見落としているいい加減な例を一つあげておこう。山川力氏は『明治期アイヌ民族政策論』(未来社、1996年12月)で、札幌農学校とクラークについて論じる中で、クラークは南北戦争に参加し奴隷解放のために闘った人であるから、逆境の民族であるアイヌにも心引かれぬはずはない、アイヌのことも耳にしていたはずである、とする。彼はクラークに期待をかけ、開拓使官僚とは違ったアイヌ認識を持っていたのではないかと、そう思いたいと、とするのである

(同上、53 - 54 ページ)。クラーク、そしてまたクラークを推薦したケプロンの活躍した時代は、アメリカでは先住民に対する同化政策が最も積極的に展開された時代であった。ケプロンが推進した北海道殖民政策もクラークらが札幌農学校で講じた殖民政策論もアイヌの同化と「消滅」を前提としたものであった。山川氏の議論はまったくの的外れ、クラークらの

本質を見抜いていない。札幌農学校の内地殖民論は帝国主義的殖民政策論の原点に転化していくのだが、これは北海道開拓とそのイデオログとなった札幌農学校の原罪ともいべきものであった。この点についてはいずれ本格的に論じるつもりである。

(3) 室蘭から札幌に至る道路が 1880 - 81 年に東本願寺の資金と僧侶たちの労働によって切り開かれたのも、東本願寺が徳川家に近かったことに対する懲罰的な動員であった。本願寺街道と称されるこの道は今も残り、札幌市郊外中山峠には記念碑が建っている。

(4) 本庄陸男の未完の大作『石狩川』は私の好きな作品の一つだが、伊達藩の支藩である岩出山藩が士族身分を剥奪され平民におとされ原野の開墾に挑む情景はまさに北海道近代史の典型であった。

(5) その現実を理解するには、不在地主であることを悔い、父から相続した農場を小作人に分配した有島武郎の仕事、不在地主に対する小作農民の闘争を書いた小林多喜二の作品などを読んだほうがはるかによく理解できる。これらは文学史上に輝く仕事であるだけでなく、北海道に寄生した本土の支配層の姿を研究によるよりもはるかに鮮明に示してくれる。